

駒大ボクシング部・小山田監督に聞く／BOX

2016.4.28 11:27

リーグ戦ではポイントゲッターとして活躍した、元WBC世界ライトフライ級チャンピオン中島成雄やロンドン五輪バンタム級銅メダリスト清水聡を輩出した駒大ボクシング部。第61回大会から一部リーグに復帰し、今年、一部リーグ復帰9年目となる駒大ボクシング部を率いる小山田裕二監督に、5月14日(土)開幕の第69回関東大学ボクシングリーグ戦について話を聞いた。(岩崎仁)

——今年の目標は

小山田監督「一部リーグでの最高順位が準優勝だが、優勝を目指して全力を尽くしたい。日大、農大の戦力が充実しているように思うが、そこに対抗していきたい。昨年のリーグ戦で東洋大が3位、駒大が4位。野球の東都大学リーグでも比較されたり、箱根駅伝で競ったりするため、意識しているわけではないが、東洋大はライバル的な雰囲気がある」

——チームの雰囲気と日常の練習メニュー、生活などは

「厳しい時は厳しいが、先輩・後輩和気あいあいとしている。部員全員寮生活で、練習場と寮が玉川キャンパスにあり、朝6時半から1時間玉川キャンパスのグラウンドでロードワーク。その後、食堂で朝食を済ませ、駒澤キャンパスで勉強し、各学部の一般学生と交流している。夕方の練習は17時半から始まる練習と、18時40分から始まる練習があり、授業の終了時間によってどちらかに参加する。普段は門限11時、12時消灯。リーグ戦などの試合があるシーズンは10時門限、11時消灯。日曜日は休みで、高校のボクシング部などと合同練習を日曜日に行った場合は他の日を休みにしている」

——今年のチームのキーマンは

「主将でバンタム級の金中竜児(岡山工業)、昨年のリーグ戦で階級賞を受賞したライトウェルター級の沖島輝(東福岡)、フライ級の重里侃太郎(興国)だ」

——高校生のスカウト活動について

「私と林田太郎コーチの2名で主要全国大会を視察して、勧誘している。各都道府県の高次の先生やOBからも情報を得ている。私が九州出身のため、九州出身者の部員が増えた。また、私の駒大ボクシング部同期、プロボクシング元OPBF東洋太平洋スーパーフライ級チャンピオン、石原英康が岐阜県出身で、中京高等学校にてボクシング部の顧問をされており、協力してくれている。彼はWBO世界ミニマム級王者となった田中恒成選手を高校時代に指導している」

——コーチ陣等の指導体制は

「監督の私と林田太郎コーチの2名体制で指導するとともに、元WBC世界ライトフライ級チャンピオン中島成雄先輩は、OB会長兼総監督として、学生の私生活と育成面でバックアップしてくれている」

——学生時代にボクシングに取り組む学生に対して

「私も経験したが、全員がチャンピオンになれるわけではない厳しい現実の中で、学生時代に一つのことに打ち込むのは大事なことだと思っている。こんな自由な時代だからこそ、厳しい局面に自分を追い込むのも必要だ。長い人生のたった4年間である。自分を見つめ、自分を鍛えて、ボクシングを通じて人間として大きく成長して欲しい。そのための素晴らしい環境が整っていると思う。」

縁あって駒大に来てくれた選手たちには、将来、「駒大でボクシングをやってよかった」と感じて、卒業後に何かしらの形で駒大に恩返しをしてもらえたら、嬉しいものだ」

——監督にとっての関東大学ボクシングリーグ戦とは


「私は現役時代、2部リーグしか経験できず、1部リーグはどうしても行きたかった場所だった。今、指導者としてそこに立たせてもらっているが、今でも後樂園ホールのリングは憧れの場所、高貴で神聖な場所、世界に羽ばたくための場所だ。1部リーグと2部リーグの違いは、1部リーグでは、全日本ランキングに入っていない選手でも、リーグ戦でものすごい力を発揮する。きっとそれは、大学の伝統や看板、OB達の思いを背負って戦っているからだろう」

駒澤大学ボクシング部

今季で関東大学ボクシングリーグ戦参戦57年目。今季1部復帰9年目。第60回大会2部リーグ優勝・1部復帰。第61回大会以降1部リーグ。第62回大会準優勝。

小山田裕二監督

1976年1月11日生まれ、鹿児島県種子島出身。鹿児島工業高等学校出身。1993年インターハイ王者。全日本選手権準優勝。

 Copyright (C) 2016 SANKEI DIGITAL INC. All rights reserved.